

# セツカクの連体修飾用法

言語学・応用言語学専攻  
2007（平成 19）年入学  
1LT07160Y 割鞆麻衣子

2011 年（平成 23）年 1 月提出

## 要旨

本論文では、セツカクの連体修飾用法について、考察した。先行研究においては、セツカクの連用修飾用法については記述されていたが、セツカクの連体修飾用法については詳しく述べられてこなかった。そこで本論文では、セツカクの連体修飾用法の特徴を、セツカクの連用修飾用法と比較しながら、様々な例文を挙げて分析した。

セツカクの連体修飾用法の構文「せつかくの N なのに Q でない」「せつかくの N だから Q しよう」「せつかくの N {が/ を/ に} Q でない」における「N」は、話し手にとって価値があると評価されている出来事を述べる名詞が入らなければならない。さらに、この構文が容認されるには、「N である」という事実/状態/出来事に重点が置かれなければならない。重点がおかれる場合としては、(i) 「N」から連用修飾用法における動詞が容易に想定できる場合、(ii) 「N」が存在している、あるいは「N」の実現が確定している場合、(iii) 「N」の現場性が高い場合、があげられる。

## 目次

1.はじめに.....	1
2. セッカクの連用修飾用法.....	2
2.1. 先行研究.....	2
2.1.1. 飛田・浅田(1994)と兪(1999).....	2
2.1.2. 渡辺(2001).....	2
2.2. 接続詞と「Q」の有無.....	4
2.3. まとめ.....	5
3. セッカクの連体修飾用法.....	6
3.1. 「N」による容認可能性の違い.....	6
3.1.1. セッカクノNの形が容認される場合.....	7
3.1.2. セッカクノNの形が容認されない場合.....	8
3.2. 「N」における価値の有無.....	10
3.3. 「N」に重点が置かれるか否か.....	11
3.4. 「N」から動詞が想定できるか否か.....	15
3.5. 「N」が存在するか否か.....	17
3.6. 「N」と文全体の関係と「N」の現場性.....	20
3.7. 「N」が特定できるものであるか否か.....	22
3.8. まとめ.....	23
4. 終わりに.....	24
参考文献.....	25

## 1.はじめに

日本語のセッカクを用いた表現の中には、連用修飾用法と、連体修飾用法がある。本論文では、用言を修飾するセッカクという形を**連用修飾用法**、体言を修飾するセッカクノという形を**連体修飾用法**と呼ぶことにする。例えば(1)において、(1a)のセッカクが連用修飾用法、(1b)のセッカクを連体修飾用法となる。さて、この両者は、言い換え可能な場合が多い。例えば、(1a)と同じ場面で、(1b)を使うことも可能である。

- (1) a. セッカクチャンスがあるのに、どうしてやらないの。  
b. セッカクのチャンスなのに、どうしてやらないの。

しかし、セッカクの連用修飾用法と連体修飾用法の間で、言い換えが不可能な場合もある。(2a)と同じ場面で、(2b)を使うことはできない。<sup>1</sup>

- (2) a. セッカクドアを開けていたのに、母が閉めてしまった。  
b. \*セッカクのドアなのに、母が閉めてしまった。

このように、セッカクの連用修飾用法を連体修飾用法に置き換えた時、容認できなくなる場合がある。その原因はどのような点にあるのだろうか。

本論文では、セッカクの基本的用法や意味を踏まえ、セッカクの連体修飾用法に注目し、多くの特徴や法則性を明らかにする。第2章で、先行研究に基づき、セッカクの基本的な使われ方である連用修飾用法について述べる。第3章で、セッカクの連体修飾用法について、連用修飾用法の特徴に基づき、言い換えた場合の容認可能性の違いや制限について考察し、第4章でまとめる。

---

<sup>1</sup> 本論文において、例文の否容認性を表すマーク「?」「??」「\*」が、セッカクの連体修飾用法の文に付く場合、対応する連用修飾用法の文の意味から離れている、あるいは同じような場面では使いつらいということを表す。したがって、文としての容認可能性は高いものでも、これらのマークが付く場合もある。

## 2. セッカクの連用修飾用法

### 2.1. 先行研究

#### 2.1.1. 飛田・浅田(1994)と兪(1999)

セッカクについての先行研究として、まず、飛田・浅田(1994)によりまとめられた用法がある。

- (3) ある物事が話者によって非常に価値があることを表明する様子を表す。ややプラスよりのイメージの語。 [飛田・浅田(1994): p.214]

さらに、セッカクについての2つ目の先行研究として、兪(1999)の記述を取り上げる。

- (4) 「せっかく」は、話者が取り上げた事柄は話者自身にとって非常に価値のあることである、という意味を表す。 [兪(1999): p.156]

#### 2.1.2. 渡辺(2001)

セッカクについての3つ目の先行研究として、渡辺(2001)における研究が挙げられる。渡辺(2001)は、セッカクが使用される文型として、下記のことを挙げている。

- (5) a. せっかく Pなのに Qでない。 [渡辺(2001): p.29(I)]  
b. せっかく Pだから Qしよう。 [渡辺(2001): p.29(II)]
- (6) a. せっかくだが Qでない。 [渡辺(2001): p.37(III)]  
b. せっかくだから Qしよう。 [渡辺(2001): p.37(IV)]
- (7) a. せっかくの Nなのに Qでない。 [渡辺(2001): p.40(VI)]  
b. せっかくの Nだから Qしよう。 [渡辺(2001): p.40(VII)]  
c. せっかくの Nが(を、に)Qでない。 [渡辺(2001): p.40(VIII)]

渡辺(2001: 29, 37, 41)では、セッカクは、(5)の2つのタイプの、どちらかの形で使われるが、(6)のように、セッカクが「P」を吸収してしまったケースや、(7)のように、「P」が吸収され「Q」は活着しているケースに変形して使うことができる、と述べている。(5),(6),(7)に対応する例文はそれぞれ、(8),(9),(10)である。

- (8) a. せっかく手料理を作ったのに、彼は食べてくれなかった。  
b. せっかく雨が止んだのだから、どこかへ出かけよう。

- (9) a. せっかくだが今日は行けそうにない。  
b. せっかくだから遊んで帰ろう。

- (10) a. せっかくの休みなのに何もしていない。  
b. せっかくの休みだから出かけよう。  
c. せっかくの休みが台無しだ。

さらに、渡辺(2001)は、これらのどの文型の場合でも、「P」「Q」の部分に入る言葉について、(11)のように述べている。

- (11) a. Pには、話手にとって価値がある、と評価されている出来事を述べる言葉が入る [渡辺(2001): p.29]  
b. Qは、Pに伴って実現することが期待され、かつその実現によってPの価値が完全となることが期待される事実でなければならない [渡辺(2001): p.31]

また、(12),(14)のような文型ではセツカクを使うことができないと言われている。まず、(12)のように、「Q」を取り除いた表現はできない。必ず「Q」まで言わなければならないのである。

- (12) \*せっかく Pだ。 [渡辺(2001): p.30]

- (13) \*せっかく料理を作った。

また(14)のように、「Q」が実現してしまうと、セツカクは使いにくくなる。「Q」は、まだ実現していないか、またはついに実現せずに終わったか、そのどちらかでなければならない。

- (14) \*せっかく Pだから Qした。 [渡辺(2001): p.32]

- (15) \*せっかく料理を作ったから、彼が食べてくれた。

そして、渡辺(2001)は、セツカクについて次のようにまとめている。

- (16) それ自身が話し手にとって価値のあるPが実現しているのに、それに伴って実現してPの価値を完全なものにする事の期待されるQが、まだ実現せず、あるいはついに実現せずじまいとなり、Pの価値が不完全に終ることへの、

渡辺(2001)は、「P」は確実表現であることから、セツカクと仮定表現はなじまない、と述べている。仮定表現を使った例は、(17),(18)である。

- (17) a. \*せっかく訪ねて行っても留守だろうよ。 [渡辺(2001): p.35]  
 b. \*せっかく訪ねて行くならい返事をもらって帰るように。 [渡辺(2001): p.35]
- (18) a. \*せっかく雨が止んでも、出かけないだろう。 [渡辺(2001): p.36]  
 b. \*せっかく雨が止むなら、やはり出発しようか。 [渡辺(2001): p.36]

## 2.2. 接続詞と「Q」の有無

セツカクが使用される文型(12)と(19)の間で、容認性や意味に違いが出てくるかどうかを考えていく。

- (12) \*せっかく P だ。 [渡辺(2001): p.30]

- (19) a. せっかく P なのに。  
 b. せっかく P だから。

まず、(12)は、接続詞（なのに/だから）と後部（Q でない/Q しよう）がないという文型である。

- (12) \*せっかく P だ。 [渡辺(2001): p.30]

(12)の文型では、(20a),(21a)のように、不自然な文となっている。しかし、(20b),(21b)のように、「のだ」を補い、後続する文を足すと、自然になる。

- (20) a. \*せっかく山へ行く。  
 b. せっかく山へ行くのだ。しっかり準備をしておけ。
- (21) a. \*せっかく良いアイデアを貰った。  
 b. せっかく良いアイデアを貰ったのだ。これを利用しない手はない。

(20b)は、「せっかく山へ行くのだから、しっかり準備をしておけ」というニュアンスに受け取ることができる。(20b)には「だから」という接続詞は書かれていないが、そ

れを想定することができるため、接続詞が省略してあっても自然に感じるのである。また(21b)では、「せっかく良いアイデアを貰ったのだから、これを利用しない手はない。」という文と同じ意味に受け取ることができる。(21b)には「だから」という接続詞は書かれていないが、それを想定することができるため、接続詞が省略してあっても自然に感じるのである。

このように、(12)の文型では容認されないが、(22)のように、接続詞はないが後部 Q を後続する文で存在させるという文型は、容認されると考えられる。

- (22) a. せっかく P なのだ。Q しよう。  
b. せっかく P なのだ。Q しないなんて。

次に、(19)は、接続詞はあるが、後部がないというモデルである。

- (19) a. せっかく P なのに。  
b. せっかく P だから。

(19)のモデルでは、(23),(24)のように、自然な文となっている。

- (23) a. せっかく山へ行くのに。  
b. せっかく山へ行くのだから。  
  
(24) a. せっかくアドバイスをしてあげたのに。  
b. せっかくアドバイスをしてあげたのだから。

(19)の文型は、容認できないことはないが、ほとんどの場合、後部 (Q でない/Q しよう) まで言ったほうがより自然に感じられる。

### 2.3. まとめ

本章では、セツカクの連用修飾用法について考察してきた。連用修飾用法は、先行研究で述べられていたように、基本的に、「せっかく P なのに Q でない」「せっかく P だから Q しよう」という 2 つの文型のどちらかに当てはまる。そのヴァリエーションとして、(i)「せっかくだが Q でない」「せっかくだから Q しよう」といった「P」が吸収された文型や、(ii)「せっかく P なのだ。Q しよう」「せっかく P なのだ。Q しないなんて。」といった接続詞が書かれない文型、(iii)「せっかく P なのに。」「せっかく P だから。」といった「Q」が吸収された文型がある。(ii),(iii)については、後部 Q の存在によって容認可能性が変わることを確認した。

### 3. セッカクの連体修飾用法

本章は、セッカクの連体修飾用法について考察していく。その際、渡辺(2001)のように、文型を立てていきながら、考察を進めていく。

(5)のようなセッカクの連用修飾用法の文型については、「P」と「Q」の内容について、先行研究で考察されている。「P」は、話し手にとって価値があると考えられている事実/状態/出来事であり、「Q」は、「P」に伴って実現することが期待される事実/状態/出来事である。しかし、(7)のようなセッカクの連体修飾用法の文型における「N」の内容については、詳しく述べられていない。

#### (5) セッカクの連用修飾用法

- a. セッカく Pなのに Qでない [渡辺(2001): p.29( I )]
- b. セッカく Pだから Qしよう [渡辺(2001): p.29( II )]

#### (7) セッカクの連体修飾用法

- a. セッカくの Nなのに Qでない [渡辺(2001): p.40(VI)]
- b. セッカくの Nだから Qしよう [渡辺(2001): p.40(VII)]
- c. セッカくの Nが(を、に)Qでない [渡辺(2001): p.40(VIII)]

セッカクの連体修飾用法について、現時点で明らかなのは、「N」は名詞であるということのみである。以下では、セッカクの連体修飾用法にはどのような特徴があり、「N」にはどのような言葉が入るのか、考えていく。

#### 3.1. 「N」による容認可能性の違い

(5)の文型を(7)の文型に変形させたとき、対応する連用修飾用法の文の意味から離れている、あるいは同じような場面では使いつらい場合があることを、1節で見た。

- (25) a. セッカく 料理を作ったのに、冷めてしまった。
- b. セッカく 作った料理なのに、冷めてしまった。
- c. セッカく の料理なのに、冷めてしまった。
  
- (26) a. セッカく ドアを開けていたのに、母が閉めてしまった。
- b. セッカく 開けていたドアなのに、母が閉めてしまった。
- c. \*セッカく のドアなのに、母が閉めてしまった。

このように、連体修飾用法の文にした際に容認可能性に差が生まれる要因とは何なのだ

ろうか。以下では、次の文型に当てはめ、例を挙げて観察していく（例文中、「P」「N」に相当する部分には下線を施している）。

- (27) a. せっかく P {なのに Q でない。 / だから Q しよう。}  
b. せっかく N {なのに Q でない。 / だから Q しよう。 / が(を、に)Q でない。}  
c. せっかくの N {なのに Q でない。 / だから Q しよう。 / が(を、に)Q でない。}

### 3.1.1.セツカクノ N の形が容認される場合

まず、セツカクノ N の形が容認される場合の例を挙げる。

- (28) a. せっかく 高いお金で晴着を作ったのに、泥まみれじゃないの。  
b. せっかく 高いお金で作った晴着が、泥まみれじゃないの。  
c. せっかくの 晴着が泥まみれじゃないの。 [渡辺(2001): p.40]
- (29) a. せっかく 先生がアドバイスをしてくださったのに、耳を貸さないからこうなるのさ。  
b. せっかく 先生がしてくださったアドバイスに耳を貸さないからこうなるのさ。  
c. せっかくの アドバイスに耳を貸さないからこうなるのさ。 [渡辺(2001): p.40]
- (30) a. せっかく チャンスが巡ってきたのに、逃してしまった。  
b. せっかく 巡ってきたチャンスを逃してしまった。  
c. せっかくの チャンスを逃してしまった。
- (31) a. せっかく 宝くじに当たったのに、換金し忘れていた。  
b. せっかく 当たった宝くじを、換金し忘れていた。  
c. せっかくの 宝くじを、換金し忘れていた。
- (32) a. せっかく 僕がパーティーを開催したのに、彼のせいで台無しだ。  
b. せっかく 僕が開催したパーティーなのに、彼のせいで台無しだ。  
c. せっかくの パーティーなのに、彼のせいで台無しだ。
- (33) a. せっかく 僕がプレゼントをあげたのに、彼女は喜ばなかった。  
b. せっかく 僕があげたプレゼントを、彼女は喜ばなかった。  
c. せっかくの プレゼントを、彼女は喜ばなかった。

- (34) a. せっかく海に来たのに、泳がないなんてもったいない。  
 b. ?せっかく来た海なのに、泳がないなんてもったいない。  
 b. せっかくの海なのに、泳がないなんてもったいない。
- (35) a. せっかく今日は休みなのに、どこにも出かけなかった。  
 b. せっかく休みなのに、どこにも出かけなかった。  
 b. せっかくの休みなのに、どこにも出かけなかった。
- (36) a. せっかく北海道へ旅行をするのだから、楽しもう。  
 b. \*せっかく旅行をする北海道なのだから、楽しもう。  
 c. せっかくの北海道なのだから、楽しもう。
- (37) a. せっかく彼はイケメンなのに、いつも髪がぼさぼさだ。  
 b. せっかくイケメンなのに、いつも髪がぼさぼさだ。  
 c. せっかくのイケメンなのに、いつも髪がぼさぼさだ。
- (38) a. せっかく早起きをしたのに、今日は日曜日だった。  
 b. せっかく早起きなのに、今日は日曜日だった。  
 c. せっかくの早起きなのに、今日は日曜日だった。

### 3.1.2.セツカクノ N の形が容認されない場合

次に、セツカクノ N の形が容認されない(あるいは容認されにくい)場合の例を挙げる。

- (39) a. せっかく僕が窓を開けていたのに、太郎が閉めてしまった。  
 b. せっかく僕が開けていた窓を、太郎が閉めてしまった。  
 b. \*せっかくの窓を、太郎が閉めてしまった。
- (40) a. せっかく植物を大切に育てていたのに、枯れてしまった。  
 b. せっかく大切に育てていた植物が、枯れてしまった。  
 c. ?せっかくの植物が、枯れてしまった。
- (41) a. せっかく貝殻を集めていたのに、母が捨ててしまった。  
 b. せっかく集めていた貝殻を、母が捨ててしまった。  
 c. ?せっかくの貝殻を、母が捨ててしまった。
- (42) a. せっかく僕がお薦めの本を教えてあげたのに、彼は読んでくれなかった。

- b. せっかく 僕が教えてあげたお薦めの本を、彼は読んでくれなかった。
- c. ?せっかくの本を、彼は読んでくれなかった。
- (43) a. せっかく ルールを教えてあげたのに、彼は理解することができなかった。
- b. せっかく 教えてあげたルールを、彼は理解することができなかった。
- c. ?せっかくのルールを、彼は理解することができなかった。
- (44) a. せっかく 僕が問題を教えてあげたのに、彼はまた間違えた。
- b. せっかく 僕が教えてあげた問題を、彼はまた間違えた。
- c. ?せっかくの問題を、彼はまた間違えた。
- (45) a. せっかく 気を遣って訪問したのに、彼は留守だった。
- b. \*せっかく 気を遣った訪問なのに、彼は留守だった。
- c. \*せっかくの訪問なのに、彼は留守だった。
- (46) a. せっかく 海岸を掃除していたのに、ゴミ袋が足りなくなりました。
- b. ?せっかく 掃除をしていた海岸なのに、ゴミ袋が足りなくなりました。
- c. \*せっかくの海岸なのに、ゴミ袋が足りなくなりました。
- (47) a. せっかく 毎日運動をしようと考えていたのに、三日坊主になりました。
- b. ?せっかく 毎日しようと考えていた運動なのに、三日坊主になりました。
- c. \*せっかくの運動なのに、三日坊主になりました。
- (48) a. せっかく 自由な時間があるのだから、有意義に活用すべきだ。
- b. ?せっかく ある自由な時間なのだから、有意義に活用すべきだ。
- c. ?せっかくの時間なのだから、有意義に活用すべきだ。
- (49) a. せっかく 試験に合格したのに、辞退してしまうなんてもったいない。
- b. せっかく 合格した試験なのに、辞退してしまうなんてもったいない。
- c. \*せっかくの試験なのに、辞退してしまうなんてもったいない。
- (50) a. せっかく 勉強を教えてあげたのに、お礼もなかった。
- b. せっかく 教えてあげた勉強なのに、お礼もなかった。
- c. \*せっかくの勉強なのに、お礼もなかった。
- (51) a. せっかく ゴミを捨ててきてあげたのに、彼女は喜ばなかった。

- b. ??せっかく捨ててきてあげたゴミなのに、彼女は喜ばなかった。
- c. \*せっかくのゴミなのに、彼女は喜ばなかった。

### 3.2. 「N」における価値の有無

セツカクノ N の容認性に影響を与える要因を考えていく。先行研究において、セツカク自体の特性については(3),(4)、「P」については(11)のような制約があると述べられていた。

- (3) ある物事が話者によって非常に価値があることを表明する様子を表す。ややプラスよりのイメージの語。 [飛田・浅田(1994): p.214]
- (4) 「せっかく」は、話者が取り上げた事柄は話者自身にとって非常に価値のあることである、という意味を表す。 [兪(1999): p.156]
- (11) Pには、話し手にとって価値がある、と評価されている出来事を述べる言葉が入る [渡辺: p.29]

どれも「価値」という言葉が述べられている。これらの考えに基づくと、「N」についても同様のことが言えると思われる。そこで、「N」について次のような仮説を立てたい。

- (52) Nには、話し手にとって価値がある、と評価されている出来事を述べる名詞が入る

この観点から改めて(51)の例文を見てみる。(51)ではNに「ゴミ」がきている。「ゴミ」というものに対し、価値がある、と考えている人はほとんどいない。価値がないと考えているからこそ、人はゴミを捨てるのである。このような価値を見出すことのできない言葉である「ゴミ」を「N」の部分に入れると、容認できない。

- (51) a. せっかくゴミを捨ててきてあげたのに、彼女は喜ばなかった。
- b. ??せっかく捨ててきてあげたゴミなのに、彼女は喜ばなかった。
- c. \*せっかくのゴミなのに、彼女は喜ばなかった。

ところが、ゴミを集めるのが趣味であるという人や、ゴミこそがアートであると考えている人もいるかもしれない。そのような、ゴミに価値があると考えている人が話し手になる場合は、(53)のように「N」の部分に「ゴミ」が入ってもそこまで不自然ではない。

- (53) a. せっかく趣味でゴミを集めていたのに、母が捨ててしまった。  
b. ?せっかくのゴミを、母が捨ててしまった。

同様に、(54)における「虫」も、「母」にとっては価値がないと思われるものであるが、(54)の話し手にとっては価値があると評価されているため、(54)の文の容認性は高くなっている。

- (54) a. せっかく虫と遊んでいたのに、母が逃がしてしまった。  
b. ?せっかくの虫を、母が逃がしてしまった。

これまでの例文から、セツカクノ N が容認される場合の「N」には、話し手にとって価値があると考えられる名詞が入るのは確かである。「ゴミ」の例のように、一般的に価値がないと考えられる「N」でも、話し手にとって「N」に価値があると考えられる文脈においては、容認性も高くなる。しかし、話し手によって価値が変化するということは、価値は付加しようと思えば付加できるものであると言えるのではないだろうか。価値は自由に付加できるため、「N」にどのようなものが入るかを決定づけるものとして、価値という表現は少々不安定である。セツカクノ N の特徴を述べるものとして、確かに(52)の仮説は間違っていないが、他にも何かセツカクノ N の容認性に変化をもたらす要因がありそうである。

### 3.3. 「N」に重点が置かれるか否か

セツカクノ N の容認性に変化をもたらす要因を考えるために、(34)と(41)の例を見てみる。セツカクノ N が容認可能な(34c)の例を見ると、「来た」ことよりも「海」であることが重要であると感じられる。

- (34) a. せっかく海に来たのに、泳がないなんてもったいない。  
b. ?せっかく来た海なのに、泳がないなんてもったいない。  
c. せっかくの海なのに、泳がないなんてもったいない。

一方、セツカクノ N が容認しづらい(41c)を見ると、「貝殻」よりも「集めていた」ことに重点が置かれているように感じられる。

- (41) a. せっかく貝殻を集めていたのに、母が捨ててしまった。  
b. せっかく集めていた貝殻を、母が捨ててしまった。  
c. ?せっかくの貝殻を、母が捨ててしまった。

この点を考慮して、次のような仮説を立てたい。

- (55) 「Nである」という事実/状態/出来事に重点が置かれる場合に、セツカクノ N という形は容認される

この点から先ほどの例を見ると、(34c)では「海」そのものに重点が置かれているから「来た」という部分がなくても容認される。他方、(41)では「貝殻」の部分ではなく、「集めていた」という部分に重点が置かれているため、「集めていた」という部分が含まれる(41b)は容認されるが、「集めていた」という部分が含まれない(41c)は容認されにくい。

Nに重点が置かれるかどうか容認性の違いを生むのであれば、同一の「N」に対して、重点の置かれ方を変えると容認性に変化が現れると予測されるが、実際そうである。

- (56) a. せっかく椅子があるのに、どうして座らないの。  
b. ?せっかくある椅子なのに、どうして座らないの。  
c. せっかくの椅子なのに、どうして座らないの。
- (57) a. せっかく椅子に色を塗ったのに、すぐに別の色に変更するなんて。  
b. せっかく色を塗った椅子なのに、すぐに別の色に変更するなんて。  
c. \*せっかくの椅子なのに、すぐに別の色に変更するなんて。

(56),(57)は、共に「N」に「椅子」がきている例である。しかし(56)は、セツカクノ N の形が容認されるが、(57)はセツカクノ N の形が容認されない。これは、(56)では、「椅子」に重点が置かれているが、(57)では「色を塗った」という「N」以外の部分に重点が置かれているため、容認性に違いが生じているのである。(58)-(75)も同様である。

- (58) a. せっかく本を買ったのだから、大切にしなさい。  
b. せっかく買った本なのだから、大切にしなさい。  
c. せっかくの本なのだから、大切にしなさい。
- (59) a. せっかく本を片付けていたのに、太郎が散らかしてしまった。  
b. せっかく片付けていた本なのに、太郎が散らかしてしまった。  
c. \*せっかくの本なのに、太郎が散らかしてしまった。
- (60) a. せっかくたわしを持っているのに、どうして使わないの。

- b. ?せっかく持っているたわしなのに、どうして使わないの。
- c. せっかくのたわしなのに、どうして使わないの。
- (61) a. せっかく新しくたわしを買ったのに、すでに買い置きがあった。
- b. せっかく新しく買ったたわしなのに、すでに買い置きがあった。
- c. \*せっかくのたわしなのに、すでに買い置きがあった。
- (62) a. せっかくご馳走をおごってもらえるのに、食べられないなんて。
- b. ?せっかくおごってもらえるご馳走なのに、食べられないなんて。
- c. せっかくのご馳走なのに、食べられないなんて。
- (63) a. せっかくご馳走をおごってもらう約束をしたのに、仕事が終わらない。
- b. \*せっかくおごってもらう約束をしたご馳走なのに、仕事が終わらない。
- c. \*せっかくのご馳走なのに、仕事が終わらない。
- (64) a. せっかく君が僕にもう煙草は吸わないと約束をしたのに、忘れてしまったのか。
- b. \*せっかくもう煙草は吸わないと君が僕にした約束なのに、忘れてしまったのか。
- c. せっかくの約束なのに、忘れてしまったのか。
- (65) a. せっかく約束を守ったら良い物を買ってあげようと思ったのに、もう買ってあげない。
- b. \*せっかく守ったら良い物を買ってあげようと思った約束なのに、もう買ってあげない。
- c. \*せっかくの約束なのに、もう買ってあげない。
- (66) a. せっかく雑誌が置いてあるのだから、読めばいいのに。
- b. せっかく置いてある雑誌のだから、読めばいいのに。
- c. せっかくの雑誌のだから、読めばいいのに。
- (67) a. せっかく雑誌を担当することになったのだから、自覚を持て。
- b. せっかく担当することになった雑誌のだから、自覚を持て。
- c. \*せっかくの雑誌のだから、自覚を持て。
- (68) a. せっかく果物をもらったのに、食べるのを忘れていた。

- b. せっかくもらった果物なのに、食べるのを忘れていた。
- c. せっかくの果物なのに、食べるのを忘れていた。
- (69) a. せっかくこの果物はおいしいとすすめられたが、私にはわからなかった。
- b. せっかくおいしいとすすめられた果物だが、私にはわからなかった。
- c. ??せっかくの果物だが、私にはわからなかった。
- (70) a. せっかく上手な絵を描いたのに、どうして評価されないのだろうか。
- b. せっかく描いた上手な絵なのに、どうして評価されないのだろうか。
- c. せっかくの絵なのに、どうして評価されないのだろうか。
- (71) a. せっかく上手な絵を描くことができるのに、どうして手を抜くの。
- b. \*せっかく描くことができる上手な絵なのに、どうして手を抜くの。
- c. \*せっかくの絵なのに、どうして手を抜くの。
- (72) a. せっかくお菓子を買ったのに、食べないなんてもったいない。
- b. せっかく買ったお菓子なのに、食べないなんてもったいない。
- c. せっかくのお菓子なのに、食べないなんてもったいない。
- (73) a. せっかく彼に渡すためのお菓子を作ったのに、本人が見当たらない。
- b. ??せっかく作った彼に渡すためのお菓子なのに、本人が見当たらない。
- c. ??せっかくのお菓子なのに、本人が見当たらない。
- (74) a. せっかくドアがあるのに、壊れていて開かない。
- b. せっかくあるドアなのに、壊れていて開かない。
- c. せっかくのドアなのに、壊れていて開かない。
- (75) a. せっかくドアを開けていたのに、母が閉めてしまった。
- b. せっかく開けていたドアなのに、母が閉めてしまった。
- c. \*せっかくのドアなのに、母が閉めてしまった。

このように、「N である」ことに重点が置かれている場合は、セツカクノ N という形は容認されるが、「N」以外のものに重点が置かれている場合は、セツカクノ N という形は容認されない、あるいは容認されにくい。従って、(55)の仮説は正しいと言える。

- (55) 「N である」という事実/状態/出来事に重点が置かれる場合に、セツカクノ N

という形は容認される

しかし、(55)の仮説には問題がある。それは、「N」に重点が置かれているかどうか判断する基準がはっきりしていない点である。

#### 3.4. 「N」から動詞が想定できるか否か

「N」に重点が置かれ、「Nである」ことがポイントとなっている場合にセッククノNという形は容認されると述べたが、どういう場合に「N」に重点が置かれるのかその条件が不明瞭であった。本節では、その条件を見つけるために、目的語と動詞の関係に注目して、セッククの連体修飾用法における容認可能性について調べていく。

前節で見た、「N」が椅子の場合で、再考してみる。

- (56) a. せっかく椅子があるのに、どうして座らないの。  
b. せっかくある椅子なのに、どうして座らないの。  
c. せっかくの椅子なのに、どうして座らないの。
- (57) a. せっかく椅子に色を塗ったのに、すぐに別の色に変更するなんて。  
b. せっかく色を塗った椅子なのに、すぐに別の色に変更するなんて。  
c. \*せっかくの椅子なのに、すぐに別の色に変更するなんて。

(56)では、「椅子がある」は、元々、これが発話される以前から「椅子」が「ある」という状況が考えられる。「N」が、動詞の部分の行為によってできたものでなく、前から存在している。他方、(57a)の「椅子に色を塗った」は、「色を塗った」結果、元々の椅子ではなくなり、「色を塗った椅子」ができあがる。つまり、動詞の部分の行為によって「N」が存在することになる。

この点から、「N」が、動詞の部分の行為によってできたものなのか、前から存在しているものなのか、という違いが、「N」に重点が置かれる条件に関与していると考え、次のような仮説を立てたい。

- (76) Nが、動詞の部分の行為が生じたことによってできたものである場合、セッククノNは容認されないが、Nが、動詞の部分の行為によってできたものでなく、前から存在しているものであれば、セッククノNは容認される

この点は、「P」の述語に作成動詞を置いた例と比較すると、はっきりしてくる。

- (77) a. せっかくマグカップを持っているのだから、使えばいいのに。

- b. せっかく持っているマグカップなのだから、使えばいいのに。
- c. せっかくのマグカップなのだから、使えばいいのに。

- (78) a. せっかくマグカップを作ったのだから、使えばいいのに。  
 b. せっかく作ったマグカップなのだから、使えばいいのに。  
 c. \*せっかくのマグカップなのだから、使えばいいのに。

(77)では、「マグカップ」は「持っている」ことでできたものではなく、この発話以前から存在しているものであるため、セツカクノNが容認される。他方、(78)の「マグカップ」は、「作った」ことによってできたものであるため、セツカクノNの形が容認されない。(79)-(82)も同様の例である。

- (79) a. せっかくみかんがあるのだから、食べなさい。  
 b. せっかくあるみかんなのだから、食べなさい。  
 c. せっかくのみかんなのだから、食べなさい。

- (80) a. せっかくみかんをもらったのだが、もう食べられない。  
 b. せっかくもらったみかんのだが、もう食べられない。  
 c. \*せっかくのみかんのだが、もう食べられない。

- (81) a. せっかく小説を持っているのに、まだ読んでいない。  
 b. せっかく持っている小説なのに、まだ読んでいない。  
 c. せっかくの小説なのに、まだ読んでいない。

- (82) a. せっかく小説を書いたのに、誰にも読んでもらえなかった。  
 b. せっかく書いた小説なのに、誰にも読んでもらえなかった。  
 c. \*せっかくの小説なのに、誰にも読んでもらえなかった。

(76)の説明はうまくいっているように見える。ところが、「N」に動詞の部分の行為が生じたことによってできたものがきている場合でも、セツカクノNが容認される例がある。

- (83) a. せっかく写真を撮ったのに、焼き増しするのを忘れていた。  
 b. せっかく撮った写真なのに、焼き増しするのを忘れていた。  
 c. せっかくの写真なのに、焼き増しするのを忘れていた。

(83)の「写真」は、「撮った」ことによってできたものである。にもかかわらず、(83c)は容認される。これは、「写真」から「撮った」という動詞が想定できるため、(83c)から(83a)を想定することができると考えられる。つまり、「N」から連用修飾用法における動詞が容易に想定できる場合、連体修飾用法に言い換えても容認できる、と言える。

以上のことから、(76)の仮説の、「Nが、動詞の部分の行為が生じたことによってできたものである場合、セツカクノ N は容認されない」という部分は、不適切であることが分かる。そこで(76)の仮説を次のように訂正し、さらに(85)の制約を加える。

(84) Nが、動詞の部分の行為によってできたものでなく、前から存在しているものであれば、セツカクノ N は容認される

(85) Nから連用修飾用法における動詞が容易に想定できる場合、セツカクノ N の形は容認される

### 3.5. 「N」が存在するか否か

3.3 節において、「N」が、動詞の部分の行為によってできたものでなく、前から存在しているものであれば、セツカクノ N は容認される、という仮説(76)を提示した。その時に考察した(66)のような例を見ると、セツカク P {ダカラ../ナノニ..}の「P」の述語が、「ある」「持っている」等の発話時点において「N」が存在していることを表す述語であった。(66)を見ると、「雑誌」は「置いてある」のだから、その場に「雑誌」が存在している。

- (66) a. せつかく雑誌が置いてあるのだから、読めばいいのに。  
b. せつかく置いてある雑誌のだから、読めばいいのに。  
c. せつかくの雑誌なのだから、読めばいいのに。

一方、(67)では、「雑誌」を「担当している」からといって、必ずしも「雑誌」が存在しななければならないわけではない。

- (67) a. せつかく雑誌を担当することになったのだから、自覚を持て。  
b. せつかく担当することになった雑誌なのだから、自覚を持て。  
c. \*せつかくの雑誌なのだから、自覚を持て。

(66c)と(67c)で見られる「雑誌」の違いは、「雑誌」が存在しているかどうか、という点である。このことから、次のような仮説を立てたい。

(86) Nが存在している場合、セツカクノNの形は容認される

この仮説(86)が妥当かどうか、検証していく。(87)-(91)は、「N」が存在しているため、セツカクノNが容認できる例である。

- (87) a. セツカクケーキがあるのに、どうして食べないの。  
b. セツカクあるケーキなのに、どうして食べないの。  
c. セツカクのケーキなのに、どうして食べないの。
- (88) a. セツカクピアノを持っているのに、弾かないなんてもったいない。  
b. セツカク持っているピアノなのに、弾かないなんてもったいない。  
c. セツカクのピアノなのに、弾かないなんてもったいない。
- (89) a. セツカクお菓子を持っていたのに、食べるのを忘れていた。  
b. セツカク持っていたお菓子なのに、食べるのを忘れていた。  
c. セツカクのお菓子なのに、食べるのを忘れていた。

(90)の「才能」や、(91)の「技術」は、目に見えるものではないが、「ある」と言えるものであるため、確かに存在すると言える。

- (90) a. セツカク才能があるのに、どうして諦めるのだ。  
b. セツカクある才能なのに、どうして諦めるのだ。  
c. セツカクの才能なのに、どうして諦めるのだ。
- (91) a. セツカク技術を持っているのに、それを使う場面がない。  
b. セツカク持っている技術なのに、それを使う場面がない。  
c. セツカクの技術なのに、それを使う場面がない。

一方、(92)-(97)は、「N」が存在していないため、セツカクノNが容認できない例である。

- (92) a. セツカク字が上手なのに、どうして雑に書くの。  
b. \*セツカク上手である字なのに、どうして雑に書くの。  
c. \*セツカクの字なのに、どうして雑に書くの。
- (93) a. セツカク試合をすることが決まったのだから、頑張って練習をしよう。

- b. ?せっかくすることが決まった試合なのだから、頑張って練習をしよう。
- c. \*せっかくの試合なのだから、頑張って練習をしよう。

- (94)
- a. せっかく逆上がりができるのに、どうしてできない振りをするの。
  - b. ?せっかくできる逆上がりなのに、どうしてできない振りをするの。
  - c. \*せっかくの逆上がりなのに、どうしてできない振りをするの。

- (95)
- a. せっかく熱が下がったのに、無理をするからこうなるのだ。
  - b. ?せっかく下がった熱なのに、無理をするからこうなるのだ。
  - c. \*せっかくの熱なのに、無理をするからこうなるのだ。

- (96)
- a. せっかく風邪が治ったのに、今度はお腹が痛くなった。
  - b. ?せっかく治った風邪なのに、今度はお腹が痛くなった。
  - c. \*せっかくの風邪なのに、今度はお腹が痛くなった。

以上の例から、仮説(86)が妥当であるように見えるが、「N」が存在していなくても、セツカクノNの形が容認される場合もある。(97),(98)を見ると、「旅行」や「外出」は存在しているとは言えない。にもかかわらず、どちらもセツカクノNの形は容認される。

- (97)
- a. せっかく来週旅行に行くのに、天気予報は雨だ。
  - b. せっかく来週行く旅行なのに、天気予報は雨だ。
  - c. せっかくの旅行なのに、天気予報は雨だ。

- (98)
- a. せっかく外出したのだから、もっと楽しめばいいのに。
  - b. ??せっかくした外出なのだから、もっと楽しめばいいのに。
  - c. せっかくの外出なのだから、もっと楽しめばいいのに。

なぜ(97c),(98c)が容認可能であろうか。「旅行」「外出」は、確定している出来事である。確定している出来事は、当該の出来事が存在することを意味する。そう考えると、出来事に対して存在するという言葉が適切でないだけで、仮説の考え方自体は正しいと思われる。そこで、(86)の仮説を、次のように言い換える。

- (99) Nが存在している場合、あるいはNの実現が確定している場合、セツカクノNの形は容認される

### 3.6. 「N」と文全体の関係と「N」の現場性

これまで、前部、つまり「P」の部分に注目して話を進めてきたが、後部の違いによって、セッカクノNの容認性に違いが生じている場合もある。(100),(101)では、どちらも「P」が「プリンが今日の給食のデザートだった」であり、「N」は「プリン」であるが、後部「Q」が異なるために容認性に差が出ている。

- (100) a. せっかくプリンが今日の給食のデザートだったのに、残してしまった。  
b. せっかく今日の給食のデザートはプリンなのに、残してしまった。  
c. せっかくのプリンなのに、残してしまった。
- (101) a. せっかくプリンが今日の給食のデザートだったのに、欠席してしまった。  
b. せっかく今日の給食のデザートはプリンなのに、欠席してしまった。  
c. ??せっかくのプリンなのに、欠席してしまった。

これは、「プリン」から「残す」ということは連想できるが、「プリン」から「欠席する」ということは連想できないことによると考えられる。そこで、次の仮説を立てたい。

- (102) Nが文全体の主題となっている場合には、セッカクノNが容認されるが、そうでない場合は容認されない

(103)-(110)は、前部は同じであるが、「N」が文全体の主題となっている場合と、そうでない場合とを組みにして順に挙げた例である。

- (103) a. せっかくパソコンを修理してもらったのに、また壊してしまった。  
b. せっかく修理してもらったパソコンなのに、また壊してしまった。  
c. ??せっかくのパソコンなのに、また壊してしまった。
- (104) a. せっかくパソコンを修理してもらったのに、お金を払うのを忘れていた。  
b. せっかく修理してもらったパソコンなのに、お金を払うのを忘れていた。  
c. \*せっかくのパソコンなのに、お金を払うのを忘れていた。
- (105) a. せっかくケーキを買ってきたのに、食べられなかった。  
b. せっかく買ったケーキなのに、食べられなかった。  
c. ??せっかくのケーキなのに、食べられなかった。
- (106) a. せっかくケーキを買ってきたのに、帰ってしまった。

- b. せっかく買ってきたケーキなのに、帰ってしまった。
- c. ??せっかくのケーキなのに、帰ってしまった。

- (107) a. せっかく本を読んでいたのに、取り上げられた。  
 b. せっかく読んでいた本なのに、取り上げられた。  
 c. ??せっかくの本なのに、取り上げられた。

- (108) a. せっかく本を読んでいたのに、周りがうるさくなってきた。  
 b. \*せっかく読んでいた本なのに、周りがうるさくなってきた。  
 c. \*せっかくの本なのに、周りがうるさくなってきた。

- (109) a. せっかく写真を渡そうと思っていたのに、焼き増ししていなかった。  
 b. せっかく渡そうと思っていた写真なのに、焼き増ししていなかった。  
 c. ?せっかくの写真なのに、焼き増ししていなかった。

- (110) a. せっかく写真を渡そうと思っていたのに、すっかり忘れてしまった。  
 b. せっかく渡そうと思っていた写真なのに、すっかり忘れてしまった。  
 c. ?せっかくの写真なのに、すっかり忘れてしまった。

上例から、「N」が文全体の主題となっても、セツカクノ N が容認されない場合や、「N」が文全体の主題となっていなくても、セツカクノ N が容認される場合があるとわかった。「N」が文全体の主題となっているかという点に注目してみたが、規則性は見出せず、予測と全く異なる結果となった。このことから、セツカクノ N の容認性に変化を与えているのは、後部ではなく、やはり前部の内容であったと言える。

- (111) a. せっかく才能があるのに、それを活かさないなんてもったいない。  
 b. せっかくある才能なのに、それを活かさないなんてもったいない。  
 c. せっかくの才能なのに、それを活かさないなんてもったいない。

- (112) a. せっかく才能があるのに、どうして諦めるの。  
 b. せっかくある才能なのに、どうして諦めるの。  
 c. せっかくの才能なのに、どうして諦めるの。

そこで、本節のはじめに挙げた(101)の例を再び考える。

- (101) a. せっかくプリンが今日の給食のデザートだったのに、欠席してしまった。

- b. せっかく今日の給食のデザートはプリンなのに、欠席してしまった。
- c. ??せっかくのプリンなのに、欠席してしまった。

(101)の場合、「欠席して」いることから、「プリン」そのものは、目の前にない状況であると考えられる。つまり、「プリン」が存在しているかどうかは、不確実であると言える。これは、3.4.節で述べた(99)の仮説に違反する。このため、(101c)の容認性は低いのだと考えられる。しかし、この話し手が、今日のデザートはプリンであると記された献立表を見ながら、(101c)を発話したと考えると、容認性は高くなる。これは、「プリン」そのものを見ていなくても、献立表を見ることで、プリンが今日の給食のデザートだったということが想像でき、プリンの現場性が高くなっているのである。このことから、新たに次のことが言える。

(113) Nの現場性が高ければ、セツカクノNは容認される

また、(101)を、(114)のように、後部の主語を「太郎」にすると、容認性はさらに高くなる。これは、(101)の場合、話し手が「欠席して」いるため、話し手にとっての「プリン」の現場性は低いが、(114)の場合、「欠席して」いるのは「太郎」であるため、話し手にとって、「プリン」の現場性は高いためであると考えられる。

- (114) a. せっかくプリンが今日の給食のデザートだったのに、太郎は欠席してしまった。
- b. せっかく今日の給食のデザートはプリンなのに、太郎は欠席してしまった。
- c. ?せっかくのプリンなのに、太郎は欠席してしまった。

### 3.7. 「N」が特定できるものであるか否か

3.1.節において、「N」には、話し手にとって価値があると評価されている名詞が入る、と述べたが、評価するためには、事前にそのことを知っていなければならない。このことから、「N」は、特定できるものでなければならないのではないかと考えた。これまで見てきた例文における「N」も、すべて、特定できない一般的な「N」を指すのではなく、特定できる「N」を指している。しかしこの仮説の例外となる例が(115)が存在する。

(115) せっかくのご馳走だから、トリュフはかかせない。

ご馳走として挙げられるものは何か議論しようという場面で、(115)を発話したとする。この場合の「ご馳走」は、ある特定の「ご馳走」を指すのではなく、特定できない、一

般的なものを総称して「ご馳走」を指している。このように、「N」には必ず特定できるものが入る、とは一概に言うことはできない。

### 3.8.まとめ

第3章で述べた内容をまとめると、次のようになる。

- (52) Nには、話し手にとって価値がある、と評価されている出来事を述べる名詞が入る
- (55) 「Nである」という事実/状態/出来事に重点が置かれる場合に、セッカクノNという形は容認される
- (84) Nが、動詞の部分の行為によってできたものでなく、前から存在しているものであれば、セッカクノNは容認される
- (85) Nから連用修飾用法における動詞が容易に想定できる場合、セッカクノNの形は容認される
- (99) Nが存在している場合、あるいはNの実現が確定している場合、セッカクノNの形は容認される
- (113) Nの現場性が高ければ、セッカクノNは容認される

#### 4. 終わりに

以上、セツカクについて考察してきた。セツカクの連用修飾用法は、先行研究で述べられていたように、基本的に、「せっかく Pなのに Qでない」「せっかく Pだから Qしよう」という 2つの文型のどちらかに当てはまる。「P」「Q」の内容、接続詞・後部の有無による容認性の変化については第2章で述べた通りである。

セツカクの連体修飾用法は、連用修飾用法の基本モデルを変形した、「せっかくの Nなのに Qでない」「せっかくの Nだから Qしよう」「せっかくの Nが(を、に)Qでない」といういずれかのモデルに当てはまる。この「N」には、話し手にとって価値がある、と評価されている出来事を述べる名詞が入ることがわかった。さらに、セツカクの連体修飾用法の容認性に関わる制約として、「Nである」という事実/状態/出来事に重点が置かれなければならない、という点が挙げられる。どういう場合に重点が置かれるかについては、「N」から連用修飾用法における動詞が容易に想定できる場合、「N」が存在している場合あるいは「N」の実現が確定している場合、「N」の現場性が高い場合、という3点が明らかとなった。

## 参考文献

- 仁田義雄 (2002)『新日本語文法選書 3 副詞的表現の諸相』 東京：くろしお出版.
- 野田春美 (1997)『「の(だ)」の機能』 東京：くろしお出版.
- 森田良行 (2008)『動詞・形容詞・副詞の事典』 東京：東京堂出版
- 飛田良文・浅田秀子 (1994)『現代副詞用法辞典』 東京：東京堂出版.
- 兪曉明 (1999)『現代日語副詞研究』 大連市：大連理工大学出版社.
- 渡辺実 (2001)『さすが！日本語』：24-42. 東京：筑摩書房.